

研修報告書 No. 1

所 属： 昭和大学病院

氏 名： 半田 直

研修先： 大井田病院

今回の地域医療研修で私は高知県宿毛市の大井田病院で研修させていただきました。私自身は四国を訪問する機会は今までなく、東京から高知まで飛行機一時間ほどの近さであったのに対し、高知市から宿毛市まで2時間半もかかることにまず驚きました。

地域医療に参加するまでは地域医療というと、都会での医療に比べ設備が十分でないため提供できる医療は制限されるのではないかと思っていました。しかし、大井田病院では幡多地域医療情報ネットワーク「はたまるネット」やAI問診が導入されており、私はこの二つのシステムに感銘を受けました。「はたまるネット」とはこれに登録されている患者さんの医療情報を連携カルテとして共有することで、診断や治療を行う際により正確な診断、安全な処置が行えるというものです。このシステムは小さな医療圏で、人の移動も少ない地域であるからこそ最大の効力を発揮するものであると思います。首都圏では病院同士で患者情報を共有する際は紹介状の作成が不可欠であり、この作成時間や情報提供の要請が円滑な医療の障壁となることがしばしばあります。また、紹介状を作成する際に重要な情報が抜けてしまう危険性があるのに対し、「はたまるネット」では連携医療機関の日々のカルテを直に閲覧できるため正確な情報を得ることができます。

二つ目のAI問診は、大井田病院が高知県内で初めて導入した医療面談システムになります。患者さんはタブレット端末の質問に答えると、AIが追加の質問を用意したり鑑別疾患を挙げることで、少ないマンパワーで円滑に診療を進めることができ診断の見逃しも少なくなるというものです。上記2つのシステムにより大井田病院では効率的な診療が行われていたことが印象的でした。

病院ではおもに外来診療と訪問診療に従事させていただきました。診療の中で印象的だったことは内科の先生が外傷の外科的処置を行っていたり、訪問診療で褥瘡の処置を行っていたことです。私が研修している大学病院では、外科的処置が必要な状態であれば外科にコンサルトし、褥瘡の処置については皮膚科にコンサルトできる環境にあり、これがいかに恵まれた環境であったことに気づきました。同時に、これらについて自分で診ようとせず、すぐにコンサルトしていた自分に恥ずかしさを感じました。大井田先生からは「僕が研修医だったときは、担当の患者さんに起こったことはすべて自分で見なければいけない環境だったんだよ。」というお話もいただきました。循環器内科に進んで虚血性疾患治療で専門性をひたすら高めようと思っていた私にとってこのお話は衝撃的でした。今回、訪問診療で初めて褥瘡の処置を行わせていただき、褥瘡に用いる軟膏にも保湿を高めるもの、上皮化を促

すものなど様々なものがあることに気づきました。今後自分で外来を持つようになった時に患者さんに起こりうる事象に対し責任をもって対処できるよう、今後の研修医生活ではローテーションしている診療科以外の問題点にも目が向けられるようにしたいと思います。

研修後半では自身の外来を初めて持たせていただきました。最初の患者さんは「高齢者の便秘」であり、診察・検査時間を含め一人に2時間も費やしてしまい外来の難しさを直に感じる事となりました。中でも医療者でない一般の方に便潜血検査や下部消化管内視鏡検査の有用性を説明することが予想以上に難しく思いました。大学病院では指導医の家族 IC に同席する機会もあり、今後は先生方がどのように患者さんの家族に説明しているのか注意深く見学するようにしたいと思います。

最後になりましたが、1か月間私の地域医療研修で関わってくださった大井田病院のスタッフの皆様へ感謝を申し上げます。病院スタッフの方々は廊下ですれ違った際に必ず温かく挨拶されていて、多職種間でも緻密に連携されていて全員で同じ目標に向いているように見えました。いろいろな場面で不甲斐ない姿を見せてしまった点が私の心残りであり、今後さらに臨床の知識をつけていつの日かまた、大井田病院の皆様にお会いした際に自分の成長した姿を見せることができたらと思います。